
とある王家の●●なる日常

春九葉沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある王家の●●なる日常

【Nコード】

N7830V

【作者名】

春九葉沙羅

【あらすじ】

とある国のとある王家、どうしようもないアホの王子様と、その側近のお話。

※星空文庫様にも掲載させて頂いております。

一日目

清しい朝日が、真白い大理石の廊下に差す。磨き上げられたガラス窓の向こうは、冬にして珍しくも快晴だ。

カルナは考えていた。どうして毎度毎度自分があのアホを起こしに行かなくてはならないのかと。こんな仕事は新人の女給やらがすればいい。簡単な仕事だ。毎朝、定刻に一階の廊下の突き当たりのドアを開けてこう言う、「王子、起床のお時間でございます」

：まあ、そうは行かない現実があるから自分が行く訳なのだが。ドアを開ける。鍵なんぞかかっていないのはいつものことだ。

カーテンのかかった薄暗い部屋は妙に湿気っていて、酒と煙草、ハシシ、それに汗やら何ぞの体液の混ざった、ツンと鼻を付く異臭がする。先月替えたばかりのブラウンカラーのロングヘアーカーペツト（保温性抜群と評判のコイチヤー社製だ）には男物の上着やら女物の下着やらが散乱し、空のシャンペンボトルがごろごろと転がっている。王家付きのお堅い司祭が見たら卒倒しそうだ。あのじーさんの年じゃそのまま天国行き間違いなしだな。アーメン。

シャンペンと仲良く並んで寝ている男の背中を蹴ってどける。通行の邪魔だ。爪先の当たりが良かったらしく呻き声したが気にしない。続いて、革製のソファ（これもアホが前のを煙草で焦がしやがったから三ヶ月前に買ったばかりだ！）で鼾をかいている小太り男の頭を思い切り叩く。面に見合わせて案の定中身はないらしく、いい音がした。

奥のベッドにそいつはいた。

全裸にも程があるくらいに全裸で、半開きの口から涎を垂らして熟睡するこいつが次の国王だなんて、この国は本当に終わっている。

いっそ今首を絞めて殺してしまった方がいいのではないだろうか。実行すれば自分は当然殺人と内乱罪で王宮警察に捕まり、即刻処刑

されるだろうが、後に、『自らの命を賭してまで暴君から国を守ろうとした英雄』として神か聖人の様に祀られるのではないだろうか。街の広場に『救国の士』と書いた銅像の一つでも立ててくれるなら考えてもいい。

左右にひつついた裸の女も叩いてやろうかと思ったが我慢した。売女でも一応女だ。三人分まとめてこいつに、と思い、真ん中のアホ面に渾身の右平手を振り降ろした。

「起きろチンカス！」

「ッ痛ってえ！」

腹が立つくらいにいい音がした。飛び起きた後頭部にもう一発、今度は拳でお見舞いしてやる。

「てめえ何で叩くんだよ！」

「この状況見て叩かれないとでも思ったかこのアホ！さっさと起きろ！」

「王子殴る家来がどこの世界にいんだよ」

「俺も好きでやってる訳じゃねえ、お前の獣頭でも分かりやすい様にこうしてやってんだ」

「誰が獣だ！」

「獣じゃなきゃ何だ、動物にしてやっただけでも有り難いと思え、鳥頭」

「鳥頭とか言ってるじゃねえよバカカルナ！」

「俺がバカならお前は何だ虫頭」

ううう、と歯を剥き出して唸る様は完全に獣だ。知性の欠片もない。

これがこの国の王子にして第一王位継承権を持つ、アディ・アカシャ王子そのお人だ。御年十九歳、二十になる来年、大学を卒業すれば、今の王権代理者である女王からこの、こんな放蕩腦のアホ小僧に王位が移ってしまう。これは何と言う悲劇だ？ネロの再来か？

「風呂行け、酒と煙草はまあ許す、だがハシシと汚ねえザーメンの匂いにはマジで殺意が湧く」

顎で部屋のバスルームをしゃくると、しぶしぶの態でアディはベッドから立ち上がった。寝ぐせでぐちゃぐちゃの頭をぼりぼりと掻き、やり過ぎたか腰オカシイな、などと呟きながら足元はふらふらナニはブラブラ。：図体だけはやたらにデカくなりやがって、肝心の脳ミソの成長は母親の腹の中で止まっちゃまったらしい。全くこのアホをどうしたものか、バスルームに消えた背中に、この十五年、何度吐いたかも知れない溜息が洩れた。

「あれ、皆は」

「ちゃんと髪を拭け水が垂れる。：あいつらなら帰った」

「マジかよ、今から出かけようってたのに」

「さっさとここから消えねえと一家諸共処刑するってったら帰った」

掃き出し窓を指差し言ってやった。半開きになったカーテンの向こうに広がるは、美しい王宮の庭園だ。水を得てきらきら光る芝生、整然と並ぶ取り取りのコニファーはゆうに百を超える。朝の早い庭師達は既に仕事を始めていて、見るに今日はブルーエンジェルとエレガンテシマの手入れの様子だ。こっちの予定として今日中に終えて貰えるありがたいが、何せ数が数だ、難しいだろうな。

「お前最悪。そういうことすっから王家は嫌われるんだっつ」

「王家もクソもあるか、他人の家に不当侵入してる連中は普通に犯罪者だ」

「違ええ、俺のダチだ」

「玄関から入れねえ連中はダチじゃねえ」

「正門が入れてくんねえから窓から入ってんだろ」

ダチが俺の部屋に遊び来て悪いかよ、口を尖らせそう言うときのアディは拗ねた証拠だ。五つのときから変わらない、いや、成長してない、が正しいな。

「お前は王子だ」

「普通の奴らとは立場が違う、だろ」

「分かってるじゃねえか」

「毎日言われてりゃ覚えるよ、獣頭でもな」

どっかりとベッドに腰を下ろし、不貞腐れた顔で頬杖を付く。やれやれ、こうなると時間がかかるんだ。こいつに朝飯を食わせて、九時からの定例会議に出席させるのが自分の役目だ。全く、職業『王子の側近』なんてのはホント言葉だけだ、実際はアホのお守、子供あやし係、だな。

「…いいから、服着ろ。下着じゃ風邪引くぞ」

隣の衣裳部屋から持って来ておいた服をベッドに置く。糊の効いた白のシャツに、しっかりプレスしたライトグレーのスラックス。タイは嫌がるので用意していない。ソックスは新品の白。爽やかに清廉に。王族足るものイメージは大事だ。と言うよりせめて見た目だけでも真っ当な王子にしておきたい。まあ王家の関係者だけでなく国民の大概がこいつのアホさを知っているので、今更かもしれないが。

「今日の予定だ、いつも通り八時朝食、九時に会議スタート、十時半昼食、一時にイーストの農業組合からの陳情が入る。来年から上がる法人税の話だがお前はとりあえず黙って座っとけ、詳しくは俺が聞いておく。資料は朝飯の後に渡すから一応は読んでおけよ。その後サウスエンド児童福祉施設の視察が二時から。サウス地区最大規模の民間孤児院だ。施設が古くなって改築したいから補助金寄せとやって来てる。言っとくが今年の予算はもう余裕ねえからな、金の話振られても、検討し善処しますとでも言っとけ。来年頭には何とかするつもりだ。その後予定では六時に王宮に戻って、それから…」

「あーもう覚えられつかそんなの!」

「うるさい、お前の仕事だ」

「何で大学休みの日まで働くんだよ俺は」

「王子だからだよ分かってんだだろうが!手動かせ服を着ろマジで」

殴るぞ」

「もう何発も殴っただろ朝から」

「るせえ！…どこまで言ったか…、と。六時に王宮に戻り次第シヤワー浴びて着替えだ、月一恒例の晩餐会が八時から。予定は十二時終了」

「…遊び行きてえ」

ソックスに爪先だけ突っ込んで、アディはまだ唇を付き出している。メモをスモッグの胸ポケットに入れ、そこから愛用の銀時計を取り出す。七時四十分。

「ほら、早くしろ。腹は減ってるだろ」

そう言って、ベッドに畳まったままのシャツを手にとりボタンを外す。が、三つ目でもう面倒になって、アディの頭からシャツを被せた。昔、キンダーガーデンに行きたくないときよくグズっていたときもこうして無理から服を着せていたが、まさか十五年経っても同じことをしているとは思わなかった。もし、あの頃の自分に一言かけられるならば言ってやりたい、今のうちにそのガキしっかり躰けとかねえとお前苦労するぞ、と。

何しやがる、などと抜かして手足バタバタ暴れやがるので、とりあえずシャツからてっぺんだけ出た脳天に拳骨を落とす。動物の躰は拳で、十五年で達した結論だ。

「…昨年と今年の税込から算出される来年度予算としては恐らく…」

太り過ぎの経済相が汗を拭き拭き読み上げる資料（しかしひでえ文章だ、誰が書いたんだこれ）に聞き入っている振りだけをして、前方に目をやる。毎度のことだがアディは寝ている。隣に女王が座り、三十からの大臣や役人が雁首揃えた会議で上向いての堂々たる爆睡、皆もこの異常が日常になっちまって、アディに目線すらやらない。

「公共工事費としてウエスト地区のパラゴ川の堤防工事費と、ノース地区の…えー…ああ、ノースの国境沿いの道路の未舗装も恐らく…」

「経済相、もう良いわ」

その声で、会議室に緊張が走る。

「は、女王陛下…それは」

「私が今日提出する様をお願いしていたのは、公共工事予算の詳細額までが入ったデータです」

その通りだ、具体的な数字のない情報をただ連ねた予算「予想」なんぞ聞かされてもこっちはどうしようもない。

「も、申し訳ございません！官僚共の怠慢でして私としても…」

「官僚達は貴方の手足でしょう？手足を上手く使えないのは貴方の怠慢です。明後日まで猶予を与えます。そこで完全な予算案を提出なさい」

そう言っって女王は資料をテーブルに置いた。血の気の引いた顔した経済相の汗は大げさでなく滝の様に吹き出している。いいダイエツトになったなオッサン。

女王デウバ。第三十三代国王。先王ビマシダ・アカシャの崩御に伴い、当時まだ四つになったばかりだった息子アデイに代わり王を継いだ、この国の歴史上百五十年振り、三人目の女王。生まれはノース地区の有力貴族の三女で、幼いことから評判の美しい娘だった。いや、訂正しなくては、今も美しい人だ。肩で切り揃えた金髪、薄い化粧、王族と思えない飾り気のないドレス、質素儉約、公務第一の彼女の気質は、無駄使いと遊興娯楽を生き甲斐とする道楽貴族連中の生まれとは思えない。

「…ニルリト、次へ行って下さい。…アデイ・アカシャ、椅子から落ちますよ」

女王の声に、呼ばれた本人よりこっちの心臓が飛び出すかと思った。

「ああ？」

「会議中です、しつかり聞いてなさい」

「るせえな…こっちは」

「ええと、では次に、教育相」

進行のニルリトの声が、何か言いたげなアディを遮った。舌打ちの音が、静まり返った会議室に響く。もう頼むから大人しくしとけ、寝てていいから。

「カルナ」

普段の何倍か重苦しかった会議が終わり、早々に自室に戻ろうと席を立ったとき、女王からお声がかかった。

「少しいいかしら」

「はい」

何だ、アディのことで怒られんのか？ ホントとばかりだ。

「今日の晩餐会のことなのですが…」

女王は目線だけをアディに寄こした。呑気な王子様はまだ椅子で舟を漕いでいる。

「プロン卿のお嬢様がいらっしゃるの。アディに…必ず出席して貰いたいのです」

「ああ…、畏まりました。必ず」

「ありがとうございます、私が言ってもあの子は聞かないでしょうから…。
カルナ、頼りにしています」

ありがとうございます、と一礼し、部屋を出る女王を見送る。プロンの娘、と言えばハールム嬢。イースト地区を牛耳る名家の一人娘で、舞台女優の様な美しさで評判だ。貴族の娘としては珍しく大学に通う才女でもある。つまり今日の晩餐会はアディの見合いが目的ということか。まあさっさと結婚でもして落ち着いて欲しいと言うのも分らないでもない。

「カルナ、君の王子様早く起こしてくれないかな。片付けたいんだけど」

「しばらく放っておけば起きるだろ」

「だから王子が寝てると片付け進まないんだって。ほら、みんな困ってるだろ？キスでも何でもして起こしてよ」

確かに、周りの使用人や女給やらからの、下手に王子を起こして怒らせたら手に負えない、という縋る視線を感じる。

「姫様なら考えなくもねえが、アホかお前」

ひどいなあ、とニヤニヤ笑うこいつは、女王の第一側近のニルリト。二十五で王第一側近という歴史上稀に見るスピード出世、女みたいに整った顔付き、無駄に高い身長、大学も主席で出てるはずだ。口は達者で世渡りも上手い、そう言えば父親は紡績工場だったか、経営者だ。こうまで揃ってちゃこちとら勝てるどころなんぞねえじゃねえか。忌々しい野郎だ、全く。

「とにかく頼んだよ、俺は陛下の昼食の準備行くから、じゃあね」こっちもこのアホの昼飯があるんだよ、と言い返してやりたかったが昼飯食う本人が寝てるんじゃないだろうもねえ。片付けの連中に作業を続ける様命じて、椅子から落ちかかったアホをそのまま蹴り落としてやった。

書き仕事が一段落して、机の時計を見る。時刻は五時前、もうすぐアデイが視察から戻って来る時間だ。着替えて準備をしなくては。

ペンを置いて立ち上がる。窓の外の庭師達も、今日の仕事を終えた様だ。コニファアの手入れは思っていたより進んだ様で、カットの終わった木々がさっぱりとした姿で夕日を受けている。晚餐会の客人達も、王宮自慢のこの美しい庭園を喜ぶだろう。

シャワーを浴び、ふと、洗面台の鏡に移る自分を見る。

…また似てきた。二十五過ぎてからますます、だ。

髪をセットし（癖毛だからなかなか大変な作業だ）、スーツに着替える。念の為、メガネもかけることにした。黒ぶちのセルロイ

ド、度数は入れていない。顔を隠すための伊達メガネだ。

廊下の向こうから声が聞こえる。デカイ声出しやがって、あのアホ。どこにいても分かっちゃう。

アディが広間に姿を見せた途端、空気が変わる。騒めきが引き波の様に止んだ。

ワイングラスを傾けていた紳士も、談笑していたご婦人も、色とりどりのケーキに夢中だった子供達まで、何百もの視線が一斉にアディに集まる。この、圧倒的な存在感。王になるべくして生まれた人間が持つオーラ、とでも言うのだろうか。

母親譲りの柔らかな金髪、父王と同じ夏の空の色をした瞳に、横顔の映える睫毛、鼻筋。こうして見るとやっぱり綺麗な顔をしている、とは思う。何百もの視線に動じる様子もなく、黒のタキシードに身を包み立つ姿は完璧に『王子様』だ。後はその口さえ大人しくしといてくれりゃ、だが。

モーセの前の海かと思う速さで人々が分かれ、開いた道をアディは進んで行く。輝く大理石の床、一面にモザイクタイルを張り詰めた天井は大きくアーチを描き、その天辺から巨大なクリスタルシャンデリアが広間を煌々と照らしている。左右の柱には、名立たる絵師たちが描いた歴代の王の肖像画が列をなす。祭り好き、派手好きで知られた先々代の王が造らせた大広間はまさに豪華絢爛、百花繚乱、しかし少々悪趣味、だ。

広間の奥、ダンスホールに、紫色のドレス姿のデウバ女王と、白髪交じりの頭頂が少々淋しい、ひよろつと背の高い男、そしてこの国では珍しい黒髪が見えた。プロン卿と、噂のハールム嬢だ。こちらに気付いたお嬢様が、白いドレスの裾を広げて一礼する。少し傾けた顔は評判通りの美人だ。大きな黒い目を細め、アディに笑いかける。巻いた髪がふわりと揺れ、シャンデリアの光を艶やかに反射

する。

空気を察した楽団がワルツを奏で始める。アディは少し驚いた様な顔をしたが、すぐに微笑んで、お嬢様に右手を差し出した。女王も満足そうに二、三度肯く。私でいいのですかと戸惑うハールム嬢に、遠巻きから眺めていた来賓客が大きな拍手を送る。

よしよいいぞ、やればできるじゃねえかこいつも。

一時間前まで、もう晩餐会とかマジ面倒くせえ俺はダチとパブで酒飲みてえんだ、とぶつくさ文句を垂れていやがったのだが、そこは、来週末の公務を完全にゼロにしてやるから十二時までには気合を入れて王子様やれ、とまあ早い話賢い側近は飴と鞭、鼻先のニンジン作戦を講じたわけだ。子供騙しみたいな手だが、いまだ遊びたい盛りのアホにはこれでなかなか効果があるのだ。お嬢様がアディの手を取ったのを確認して、はいこれでよし。

「ご苦勞様でした」

「いいえ」

「ちよつと遅刻ね」

「…申し訳ございません」

「いいわ、連れて来てくれただけで十分よ。ありがとう。下がっていいわ」

女王からの許可も出た、となればこんな目立つところに長居は無用。後は他の使用人連中に任せて、部屋で来週の公務の調整をしよう。これでも約束は守る主義だ。

広間の重い扉を出ると、騒めきもヴァイオリンの旋律も聞こえなくなかった。本宮殿へ続く石造りの廊下は月明かりに青白く、人いきれに晒された肌に真冬の外気は刺さるかに冷たい。ふう、と白い息を付く。深呼吸すると、頭と肺が換気できた様で心地よかった。

ドンドン、いや、ドッカンドッカンか？ いずれにせよ寝ている人間を起こすにも過ぎたノック音に叩き起こされた。暗い部屋に淡く

浮き上がる枕元の銀時計は三時前を差している。誰だこんな夜中に、いや、あいつしかいないだろ、何だってんだ！

のそのそとブランケットから這い出し（この間もドアを叩き割ろうとしているんじゃないかと思う様な爆音ノックは続いている）、もうスリッパを履くのも億劫で、裸足のままカーペットを歩く。アホの部屋と同じコイチャーのカーペットは、裸足にふかふかと雲の上の心地だ、ああ、そうか、夢か？ バカな、真冬の深夜はメチャクチャ寒いし、廊下はドカドカうるせえだろ。もっと穏やかで静かで、幸せでなくちゃ夢が夢足る価値がねえ。

ドアの向こうのアホが酔ってやがったら殴ろう、安眠妨害の罪は重い。そう思って鍵を回した瞬間、突き飛ばされた。

あまりの力と不意のことで受け身もクソもない、そのまま腰から床にドスン、だ。痛ってえ！ 何だ、一体どうしたってんだ。

「カルナ：カルナッ！」

とりあえず分かったのは、人の寝巻に縋り付いて、尋常じゃない震え方をしているアホから酒の匂いがしないことだけだった。

二日目 前篇

「…カルナ様ー、終わりましたー…」

男はドアを開けた、いや、寄っかかった結果ドアが開いたという方が正解か、まあそれくらいにひどく疲れた様子だった。

「お疲れ様だな」

「いえー…、これもー、仕事ですからー」

殿下はー、第一発見者ですしー。額の汗を拭き拭き男は言う。真冬によくそんな汗が出るもんだ。下がった眉と肉の垂れた頬、郊外育ち丸出しのきつい訛りに間延びした口調、でっぷりとした菱形の体型といい、ダークブルーに十字のホワイトラインの入ったこのスモッグを着てなけりゃあ、誰もこの男を警察官、しかも金バッヂ付きの王宮警察とは思わないだろう。肉屋かなんかの気のいいオッサン（嫁はサウス生まれで気が強い）、の方がよっぽどしっくり来る。申し訳ございませんがーカルナ様にもー、一応お話をー、とこちらに首を付き出す（太った鳩みたいだ）警部さんに背いて、その頭越しに部屋を覗いた。ソファに踏ん反り返って座る金髪が見える。あれが取り調べ受けてた奴の態度か全く。分かってっか？

お前の部屋で、お前のベッドで、ハールムお嬢さん死んでたんだぞ？

「…カルナ様はー、晩餐会の時間はーどちらに…」

「部屋だ、生憎証拠はない。アリバイもない」

慣れた自室でも、そこに警察なんぞいるとどうにも落ち着かねえ。居心地の悪さに窓の外をちらり眺める。そろそろ日が落ち始めている様だ。ローテーブルに置いた銀時計を開く。針は五の少し手前、あいつに叩き起こされてからかれこれ…十四時間か。

「…そうですかー。殿下がー、参加している晩餐会にー、側近の

「、貴方が参加しないのはー…」

「いつものことだ。俺は人前がダメなんでね」

「…そうですかー。ではー、カルナ様はー、ハールム嬢とー、面識はー、ありましたかー？」

「ない。名前を知っていたくらいだ、プロン家は名家だからな」

「…そうですかー。ではー…」

ああ、疲れた。昨日の夜中から、寝るところか、飯も碌に食う暇がなかった。夜明け前、警察の到着を待つ間、デカイ図体をガタガタ震わすアディを落ち着かせる為に温かい紅茶を淹れて、自分もそれを飲んだ、それきりだ。腹も空いている、しかし睡眠欲がそれに勝る。頭は思う様に回らないし、瞼もどんどん重くなる。これが終わったらそのままベッドに直行したいもんだが、状況次第だな。

「ではー…」

「こっちからも聞いていいか」

このまま警部さんののんびり声を聞いていたら、ものの数分で寝てしまいそうだ。テーブルの向かいに座る警部は、メモを取る手を止めて顔を上げた。

「死因は窒息だな？俺が最初に見たとき、首に鬱血の跡があった」

「…今遺体は鑑定途中なのですがー、恐らくー…」

「殺しか？事故の可能性は？」

「…えー…まあー、そうですねー…」

「推定時刻ってのか？お嬢さんいつ死んだか分かるのか？」

もたれていたソファから身を乗り出し尋ねると、警部は頭を摩りながら、あまり詳しくはお話しできませんー、と申し訳なさそうに言った。

「公式にー、発表出来る様になりましたらー、カルナ様にはー、真っ先にご報告差し上げますのでー…」

「じゃあこの一瞬だけ俺は王子の側近を辞める。あんたも警部さんはお休みだ」

「はー？」

「だから、俺は今一般人だ、王宮の人間じゃねえよ、アンタの友達だよ、名前：は何だっけアンタ」

「ゴダですー」

「そう、ゴダ、俺達親友だよな」

「え、ええー？ いやあー…」

「いいやそうだ、俺達は親友だ、キンダーガーデンから一緒だった気がする、つまりは兄弟同然だ。そんな俺に隠しごとは良くねえだろ」

ゴダはああ、とかうう、とか、困っていますと言わんばかりの呻きを上げていたが知ったことか。こっちだって聞きたいことは山ほどあんだからな。

「…カルナ様ー、ご勘弁下さいー」

「様はいらねえ。なあ、ゴダ頼むよ」

「守秘義務はー、勤務外でもー、退職後でもー、付いて回りますからー！」

「…じゃあ二千でどうだ」

「にせん？」

「情報料として二千…」

「いい加減にして下さいー！」

：怒られた。権力にも金にも屈しないとは、王宮警察なかない人材置いてんじゃねえか。他のは知らねえが。

「じゃあ、ゴダ、これだけ、これだけ教えてくれ、後のことはお前の言うとおりに、報告来るまで待つから、な？」

「…何ですー？」

「…王子を疑っているか？」

日が落ち切ったのか、部屋が薄暗くなる。
少しの沈黙の後、ゴダはぽつり、言った。

「…仕事ですからー…」

どうやら寝ていられる状況にはなさそうだ。

「：終わったかよ」

「ゴダ警部が引き上げて間もなく、アデイが部屋にやって来た。

「何の用だ」

「冷てえ側近だな。俺は部屋が使えねえんだよ」

「そりゃそうだ、現場保存しなきゃなんねえからな」

「だからここ使わせろ」

「ああ？」

何を言い出すんだこいつは。

「空き部屋あんだろ」

「使わせろ」

「俺に出てけてのか」

「カルナもいろ」

：分からん。こいつの思考は独特過ぎる。

アデイは頑固だ、一度強く言い出したら、もうこっちの声は耳に入らない。例え自分がここで怒鳴ろうが殴ろうが、アデイはこの部屋を出ていこうとしないだろう。吸っていた煙草を灰皿に押し付け、ひとつため息を付く。しゃあねえ、予備のブランケット引っ張り出すか。

「アデイ、昨日の夜のこと、詳しく話せ

「：何だよ、お前も俺を疑ってんのかよ」

転がっていたソファから体を起して、アデイがこちらを睨む。青い瞳に、ガスランプのオレンジが映る。火がついた様だ。

「俺じゃねえ」

「分かってる」

デスクの上を簡単に片付け、アデイの横に座り直す。しきりに足を揺すり、苛立ちを隠そうともしないアデイが吐き捨てる様に言う。

「皆、俺を疑ってる。警察も、ここの連中も、あの女もだ！」

「警察は疑うのが仕事だ、俺のことも疑ってやがった」

アディの背中をゆっくり、大きく擦る。何度か続けるうちに、アディの呼吸が落ち着くのが分かった。頃合いを計り、声をかける。

「…な、昨日の夜、何があった？」

「…俺が部屋に帰ってベッドに転がったら女がいた」

「…もうちょっと詳しく説明してくれ。お前何時に帰った？つーかお前晩餐会は？」

「女と一曲踊って、抜けた」

「何だと！お前約束が違うじゃねえか！」

「だってよ、何か女二人で何か話盛り上がったから、もういいと思ってよ」

「いいわけあるかアホ！」

何てこった、女王に謝らなくては。いや、でもお嬢さんは死んじまった、今更見合いもあったもんじゃねえ。それよかひとり息子が殺人犯の疑いをかけられてる方がよっぽど問題だ。お前は全く、呆れて言うど、何故かアディは嬉しそうにんまりと笑った。ものすごくムカつく顔だった。思わず顔面に平手を入れてしまいうくらいに。

「…で、お前その後どうした」

「ツててて…カルナ思いつきりやっただろ」

「お前その後どうした！」

「パブで飲んでた」

「どこのパブだ」

「サウスの飲み屋街」

サウス地区から、セクター地区の王宮まで、車を飛ばしても一時間にかかる。お嬢さんが晩餐会の最後まで会場にいたとすれば、十二時まで彼女は生きていたはずだ。アディが仮に九時に晩餐会を抜け出し、キャリッジでも拾ってサウスに着くのは、早くて十時。まだ晩餐会是最中だ。アディがこの部屋に来たのは三時、逆算して、店を出たのは二時頃だろう。つまり十時から二時、この間にアディが確かにサウスにいたことが証明できれば…、いや、待てよ、お嬢

さんの死んだ時間が分からなけりや証拠にはならねえか。アデイの帰宅時間もこいつが言ってるだけで、物証はねえ。正門から入ってれば衛兵が見てるだろうが、こいつは大概裏の勝手口から城に入りやがる。しかも扉を開けずよじ登って、だ。猿か。

「その店教えろ」

「何でだ」

「お前のアリバイを証明できるのはその店員くらいしかいねえだろうが。お嬢さんが死んだ時間にお前が城にいなかったことを警察に分からせんだよ」

「あー…」

「あんだよ」

大げさに首を振ってアデイは言う。

「あんま覚えてねえ…適当に行ったから」

「ッ死ね！このアホ！」

「痛ってえ！お前バカスカ叩くんじゃねえよ！頭悪くならたらどうすんだ！」

「元々悪い頭が悪くなるかアホ！グーでなかっただけありがたく思え」

サウスの飲み屋街ったら百近く店あんだろ、二、三日で探せる数じゃねえ。チクショウ、どうする、このままじゃこのアホとっ捕まっちゃうぞ。

ローテーブルの上の煙草を取る。俺のдар、とアデイが言ってくるが無視してマツチを擦った。燐の匂いが鼻先を掠める。

「…何だこれ、甘えな」

「人の盗ってその言い草かよ」

「お子ちゃんにはいい味だな」

まるでケーキかアイスクリームみたいなバニラの香りがする。そういえばこいつは大酒飲みのくせして甘いものも好きだな。変なやつ。

「部屋に帰ったときはどんだった」

「別に：普通だったよ。窓から入って、もう眠かったからそのままベッドにどーんって転がったら：」

「先客がいたわけか。そのとき灯りを付けてたか？」

「いいや、暗いままだ。ダチか女かが勝手に来てんだと思ってよ、起こさねえと邪魔だしって触ったら、もう超冷てえんだよ。んで灯り付けたんだ。そしたら：」

「そんでビビって俺んとこ来たわけか」

別にビビったわけじゃねえ！と抜かす（あのときあれだけがたがた震えてたやつが何を言うか）アディにそうかそうかと適当に返して、ガラスの灰皿に煙草の灰を落とす。

自分がアディの部屋に確認に入っただけのことを思い返す。寝起きで、しかもこいつの様子が尋常じゃなかったからこっちもかなり混乱していた。記憶は曖昧だ。部屋に入って、そうだいつものとおり鍵はかかっていなかった。灯りは確かに付いていたと思う。奥のベッド、サイドチェストの小さなランプ、それでも暗いと思い、ドアの脇のルームランプに火を付けた。ベッドに人がいるのが見えた。ハールム嬢だった。

「お嬢さんだとは分かったか？」

「いや、分かんなかった」

そうだろう、正直思いつくのも嫌なくらいにひどい顔だった。苦悶の表情とはまさしくあのことなんだろう。ぼさぼさの長い髪、青白い肌、見開いた目と、飛び出た舌、口元の血：たった数時間前の、あの煌びやかで美しかった彼女の姿は見る影もなかった。

ひとつ思い付いたことがあった。アディに尋ねてみる。

「お嬢さん服着てたか？」

「：着てなかったと思う。ああ、そうだ、裸の女が死んでるって思っただし」

そうだ、自分が見たときも、お嬢さんは服を着てなかった。

服、そうだ、服だ。部屋の中に彼女の服はあっただろうか？晩餐会でお嬢さんが着ていたのは、肩の大きく開いた白いドレスだった。

犯人が持ち去ったのか？でもどうして？単純に、かかえて逃げるに邪魔だろう、あんなかさ張るもの。

んん、と呻き、アディが体を伸ばした。ポケットの時計を開く。八時前だ。

「飯食うか」

「：いいよ、あんま食う気にならねえ」

「ってお前朝から何にも食ってねえだろ」

不味い煙草を灰皿にねじ込みソファを立つ。どこ行くんだ、と視線を上げたアディの顔には疲労の影が濃い。

「飯取って来るから、お前ここで待ってろ」

「俺も行く」

「ダメだ、ここで待ってろ」

「何だよ」

「：アホ、犯人がまた城の中うろついてやがったらどうすんだ。この部屋の周りには警備がいるけどな、廊下で出くわしたらもうどうしようもねえぞ」

「お前だって危ねえじゃねえか」

「俺は大丈夫だ」

「俺よか小っせえカルナが大丈夫なわけねえだろ」

「るせえ、身長は関係ねえ。お前の：」

言いかけた言葉を飲み込む。多分これを言うとアディは怒る。それこそ手のつけられないくらいに、だ。咄嗟に代わりの言葉を探す。「：お前は図体だけだろ、脳に栄養要らねえから体ばっか育ちやがって」

「カルナのアホ、ハゲ、オッサン」

「語彙が五歳レベルだな。いいからお前はここで待ってろ、いいな、すぐ戻る」

「カルナ」

「何だよ」

「：バーカ」

言い返してやりたいがキリがなくなるので堪えた。大人は子供に譲ってやるもんだ。

部屋を出る。警備に付いた（実際のところは容疑者であるアデイの見張りも兼ねてだろうが）警官に軽く手を上げ、廊下を歩く。いつもと同じ、冬には冷たい大理石の廊下だ。いつもと同じ窓、二階への階段。使用人棟への勝手口。二十七年間ここに置いてもらった。行き場のない自分にとってここは仕事場であり、家だ。

行くところなんてない。帰る場所もここしかない。

ここで生きる以外を知らない。

勝手口のドアを開ける。真冬の夜は身を差すかに冷たい。足裏から一気に上がって来た寒さに震えて、灯りのついた使用人棟へ走った。

二日目 後篇

使用人棟一階のダイニングホールでは、まだ何十人もが忙しく働いていた。ここひとつで二百名以上いるこの城の使用人達の三食を賄うわけだ、八時半なら、夕食の片付け真っ只中、という時間だろう。かちやかちや食器の鳴る音が、ただ広いホールのあちこちから聞こえる。

カウンター越しに、こちらもバカ広いキッチンを覗き込む。珍しい客（王族直属の側近は本宮の、仕える主の隣かすぐ近くに執務室兼寝室を与えられているので、この使用人棟には滅多と入らない。ちなみに女王の側近はあのいけ好かねえニルリトを筆頭に五人いるが、アディには自分だけだ。おかしくないかコレ？）の登場に、キッチンのスタッフの視線が八方次々こちらに集まる。皿を直していた赤毛の女とちょうど目が合ったので、そいつにヤイメーを呼んでくれる様に頼んだ。

しばらくして、キッチンの奥から丸いシルエットが歩いて来た。顔も体も、ついでにトレードマークのメガネもまん丸の、ヤイメー。困ったときのゴットマザー様だ。

「あれえ、カルナ、どうしたのこんなところで」

「久しぶりだな、ヤイメー」

「ねえ、久しぶりだねえ、元気そうで良かったよお」

目だか皺だか分からなくなるくらいに細くしたヤイメーが、うんうん肯きながら言う。料理士の着る白いスモッグとバンダナ、それぞれ肩と四隅にレッドラインが入っている。ヤイメーはこの責任者のひとりで、一番の古参でもある。

「ヤイメー忙しいとこ悪いんだけど、残り飯とかない？」

「何さ、あっちでご飯食いっぱぐれちまったのかい？」

「まあな、てかそれどころじゃねえんだよ」

「ああ、聞いたよお、アディ様えらいことになっちまったねえ」

「まあな、でもアディじゃないぜ、やったのは」

「分かってるさ、アディ様は確かにちったあやんちゃだけど、根は良い子だあ」

ちよつと待ってな、とヤイメーはキッチンへ入って行つた。

「そうだねえ、スープとパンと、ベーコンくらいなら焼いたげるよお」

「ああ、何でもいいんだけど、二人分頼みたいんだ」

「うん？ほんじゃあちよつと待ってなあ、準備するからあ」

いそいそとキッチンに入つたヤイメーを見送って、とりあえず近くのテーブルで待つことにした。見回すと、ホールの片付けは粗方済んだ様だ。ずらり並んだ木製のテーブルはどれも綺麗に拭き清められ、椅子も定位置にきっちり戻っている。連中の仕事の早さはさすがだな。ヤイメーはのんびりそうに見えて仕事には結構厳しいんだ。

そう、子供の頃、使用人見習いとして最初に覚えたのが、このダイニングホールでの作業だった。朝食の準備に当たると四時起きだったのが辛かったが、それでもヤイメーや、今はもう退職してしまった料理士のオバチャン達は、ひとりだけ子供だった自分を氣にかかけ色々と世話も焼いてくれたし、母親がまだ生きていたときに働いていたのがこのダイニングホールだったってのもあって、それでも子供なりに必死で周りに付いて行こうと頑張っていた、と思う。

十五年前の春、先王が死に、今の女王にアディの世話役を申し使つたときは正直驚いた。自分だけじゃない、ここのスタッフ達もだつたし、ヤイメーなんか驚きのあまりキッチンで貧血起こしてそのまま一日寝込んじまつた。それくらいあり得ないことだった。まだ子供で、女王からすれば大凡疎ましの存在であろうこの自分が、大事な大事な王子様のお世話をするなんて。

「あの、カルナ様」

声をかけてきたのはさっきの赤毛の女だ。何だ、と尋ねると、女は白いカップをテーブルに置いた。

「ヤイメーさんからです」

「ああ、ありがとう」

湯気に乗る、ふくよかなダージリンの香り。不思議なもので、部屋に常備してある茶葉はヤイメーに分けてもらっているものの、自分が淹れてもこう美味くならない。とうに煙草でやられちまっているこの舌と鼻でもはつきり差が分かるほど、ヤイメーの淹れる紅茶は香り高く、渋みも爽やかで美味い。使用人棟で寝起きしていた頃は毎朝淹れてもらっていたが、今はそうもいかない。年に二、三度、何かの用事のついでにここに顔を出すときくらいだ。お砂糖お持ちしましょうか、と尋ねられたが断った。紅茶はストレート、混ぜ物はしない主義だ。

「カルナ様…」

「何だ？」

「あの…」

トレイを胸に抱えた赤毛の女は、考えを巡らす様に目を忙しなく動かしていたが、意を決した様に口を開いた。小柄で、美人ではないが愛嬌のある、可愛らしい顔をしている。年は自分より三つか四つ下くらいだろうか。

「プロンのお嬢様のことなんですが…」

「…アディは何もしてない。ここの皆にもそう伝えてくれ」

「それは分かっています。アディ様はそんなことする方じゃありません。違うんです。あの、実は、私の妹がプロン家で使用人をしていまして…」

「へえ」

「妹が言うに、あのお嬢様って、あの、何て言うか…」

「ん？ いいから言ってくれ、俺はあのお嬢さんとは初めましてだったんだ」

「…はい、あの、あまりいい方ではなかったみたいです。お屋敷に日替わりで男の人を連れ込んだり、危ないお店に出入りしたり、ものすごい金額の買い物をいきなりしてきたり…プロン様もかなり困ってらっしゃったみたいです」

「どっかの王子にもそんなやついるけどな」

女は返事に困った様子だ：くそ、笑いどころだろここは。

「：その何だ、確かにアレだな、困るな」

真偽はさておき（女達の会話に多少の誇張はあって然るべきだ）、そんな（噂が立つ様な）のが嫁に来たらえらいことだった。こっちはアディだけでも手を焼いて焼いて、これ以上どの手を焼いたらいいんだ燃やすとこ残ってねえぞって思ってたのに。ニルリトの奴身辺調査しなかったのか？

「はい。陛下お自らでお嬢様を晩餐会にお誘いしたと伺って、気になっていたんです。もしかして、アディ様のお相手にとお考えでいらっしゃるのかと：」

「ああ、噂ってのは回るもんだな。実際そうだったんだが：まあ今となってはな」

良かった、はまずいな。お嬢さん死んじまったんだ、良くはねえが、この国の将来（と自分のこれから）にとっては正直良かった、と言わざるを得ないか。マジでアディの嫁にはまともな、良識ある人間になってもらわねえと困る。何せ来年にはあれが国王陛下だ。嫁は必然的に女王陛下なわけだしな。次の王はアホだ、多分側近が言っちゃなんのだろうが、あいつは今更どうしようもねえ。なら、せめて女王には一般常識くらい通じて欲しいってのは贅沢な望みじゃないだろう？

「アディ様がご結婚：きつとすごく素敵でしょうね」

「まあこの国の威信がかかってるからな、盛大な結婚式にはしてやるさ」

諸外国に一発イットかねえとな。国の公式行事は、武力以外で国力をアピールする機会としてデカいからな。

「それですけど、婚礼衣装のアディ様、きつとすごくすつごおく、お美しいですよね！」

紅潮した顔で女が言った。あーはいはい、そうですね、良かったね。全くこれだから女は。男は顔だけじゃねえんだぞ。

ベーコンサンドイッチとトマトと豆のスープの入ったバスケットを抱えて部屋に戻ると、アディはソファで眠っていた。長い手足（ムカつくがこう表現する以外にない）を窮屈そうに丸め、薄いブランケットに包まったその姿は、普段のあの暴君振りはどこへやら、親に叱られ、拗ねたまま眠ってしまった子供、そんな感じだ。

「アディ、起きられるか。ちょっと飯食ってから寝ろ、な？」

バスケットをテーブルに置いて、ブランケットの上からそっと体を揺する。さすがに叩き起こすのは憚られた。こいつが疲れているのも、傷付いているのも承知だ。うう、と喉を鳴らしたアディがもそもそと体を動かす。今のうちだ、バスケットの蓋代わりの布を取って、皿を並べる。誰と食べるのと聞かれたので王子だと返すと、ヤイメーはまた卒倒するかと思うくらいに驚いていたが、だって考えてもみろ、王族専属のシェフに今から飯作ってもらったら何時間かかると思ってるんだ。あいつらはサラダの野菜を裏の農園に取りに行くところからが料理だと思ってる連中だぞ。夕飯にありつける頃には日付が変わってる。

テーブルの準備が粗方終わり、アディ、ともう一度声をかける。丸まった背中が伸びて、カルナ？と擦れた声で呼ばれた。どうやら起きた様だ。

「飯食え、んで歯磨いて顔洗ってから寝ろ」

「…めし…」

「ああ、驚け料理士長ヤイメーの手作りベーコンサンドだ、いらねえなら俺が食うぞ」

「食う…」

アディはまだ時間がかかりそうだ、先に食つところ。まだ温かいサンドイッチに手を伸ばす。分厚いベーコンにレタス、焦げる手前までしっかりトーストされているのは、多分好みをまだ覚えてくれるからこそだろう。

「いいにおいすんな」

「お前に食わせるったらヤイメー泣いて止めるんだよ、笑っちゃうぜ」

「…何でだよ」

俺に食われんのヤなのかよ、と皿に伸ばした手を引っ込めてしまったので、

「使用人の料理がアディ様のお口に合うわけがないー！てな」

「あんだよそれ」

「何だろうな」

「美味しい」

相槌だけ返して、残りのサンドイッチに齧り付いた。うん、美味しい、正直シェフの飯よりこっちの方が好きだ。子供の頃食ってた味だからか。

ふたりして黙々と飯を食い、終わった側からアディはまたソファに転がった。ベッドを使う様に言ってみたものの、あああ、とかうう、とか何だか分からん呻きが返って来るだけで、一向に動こうとしないので、もう放っておくことにした。まあ持ち主と居候なら前者がベッドで寝るのが当たり前か、それにこのソファは寝るに十分な幅もある（しかしこいつでは微妙に丈が足りないらしいのがムカつくが）しな、と思い、優しい側近の気使いとしてブランケットの上から大きめのバスタオルも乗せてやった。普段全裸で寝てるんだ、服着てこれだけ被ってりゃ寒かねえだろ。

自分のベッドに腰を降ろして、一日を振り返る。

何であのお嬢さんは死んだのか。いや、もうこの際それはどうでもいい、どうしてお嬢さんは、アディの部屋で死んだのか、だ。あのアホは四六時中部屋の鍵を閉めない、つまり昨日の夜も、誰でも入れる状態だっただろう。犯人はアディの部屋で女を殺したのか？それとも犯行現場は別にあって、そこからお嬢さんをアディの部屋まで運んだのか？

しかし考えてもみろ、城の一階だけでも部屋は三十近くだ。鍵は

かかっているものの空き部屋はそこかしこにあるし、共用のトイレやシャワールーム、リネン室なんかもあるわけで、人目に付かない場所なんぞ、この広い王宮探せばいくらでもある。にも関わらず、アディの部屋――一階の一番奥で廊下の突き当たり、部屋の履き出し窓の外はだっ広い中庭で、そこを東に歩いて前方に正門、西に使用人棟への勝手口だ。当然正門には衛兵が二十四時間駐在しているし、夜間は中庭にも数名が警備に就いている。昨日は晩餐会だったからその数は普段の倍か、それ以上だったろう。そして勝手口付近は、深夜でも夜番の使用人達の行き来がある。つまり、「人の目を避けて犯行に及ぶこともその後逃げるもの難しそう」な場所の「アディの部屋」に「わざわざお嬢さんを連れ込んだもしくは運び込んだ」ことになる。それって妙じゃないか？ いやだってそうだろう、だって、これじゃ死体も犯人自身も、誰か見つけて下さいと言わんばかりじゃねえか。

仮に犯人が外部からの侵入者で、城の内部を詳しく知らなかったとしよう……いや、それはあり得ねえ。もし自分があのお嬢さんに遊ばれただとか貢がされただとか、何らかの理由で許しがたい恨みを持っていて、もう殺さないと気が済まねえ！ となったとして、わざわざクソ目立つ王宮でことを起こすか？ ここには何百の人間がいるんだから、単純にそれだけ見つかる危険性も大きい。自分ならもっと考える。もっと人目に付かなくて、自分が疑われにくい場所を探すだろう。少なくとも決行の地に、この国で一番デカくて一番有名な建造物である王宮は選ばない。そうだな、自分なら例えばニルリの親父の工場だとか、サウスエンドパーク……あの無職のガキ共の溜まり場辺りとかかな。

ならば犯人は愉快犯……人は殺すことそれ自体が目的で、誰でも良かったのか？ だったら……ああ、ダメだ、頭がこんがらがって来た。やっぱり犯人が上がらねえと後先の考え様がねえか。

どん詰まりの思考を切ってベッドに体を倒すと、猛烈な睡魔が襲って来た。ああ、疲れてたんだな、と人ごとみたいに思って、枕に

顔を埋める。視線の端、暗い部屋にぼおつと金色が見える。

…可能性としては考えとかねえといけねえんだろうな、ふと思つた。がすぐにアホらしくなって止めた。ヤイメーも、あの赤毛の女も言つてたじゃねえか。あのガキは確かにアホだし、手癖も酒癖も女癖も悪い、挙句、軽度ではあるがジャンキーだ。まあクズと言つて過言じゃねえ。

それでも、あいつ嘘は付かねえ。いや、付けねえ。あいつはバカが付く正直者だ。イエスはイエス、ノーはノー。好きなものは好き、嫌いは嫌い。話す相手も場所もあいつには関係ない。ただ思ったことをそのまま口に出すだけだ。そう、まるで動物、脳じゃなくて脊髓反射だけで生きてる新種の動物だ。嘘付けるほど賢くも器用でもねえって、この十五年で誰より知ってるだろう。大丈夫だ、あいつがやつてねえって言うならそうなんだろう。

あいつを陥れようとしてるやつがいるのかもしれない。受けて立つてやる。王家に仕える者として：いや、こいつの側近として、こいつにかかる火の粉は徹底的に払い尽くしてやるさ。

目を閉じてても、瞼の裏に金が残る。夜空に太陽が顔出しちまった様で、ちよつと笑えた。

三日目 前篇

翌日。

ルーチンワークである朝の会議：だが、かつてない異様な雰囲気だ。

まず上座二席が空いている。しかし出席者は普段より多い。いつも大臣連中に官僚たち、そして、警察。そろそろいやがる。王宮警察のトップであるルーナ局長、その隣にジュマリー課長、課長補佐キインカ、護衛官長のムウヒ、そしてヨンソン刑事官長。それぞれハゲ、チョイハゲ、デブ、ヒゲ、メガネ、いつもより多めにご用意しました取り取りのおっさん共、揃いも揃って仲良く眉間に皺寄せて、難しい顔して並んで座っております、ってどこか。マジ最悪の光景だな。

「ええと。まず私から。女王陛下は未だ体調がご回復されておりませんので、今日の公務は中止とさせて頂きます。火急の要件のあります方は、私ニルリトか、ティーリ補佐官にお願い致します」

「：一応こちらから連絡しておくが、王子も体調不良故今日の公務は行わない」

：普段からまともに公務してないだろ、と自分で突っ込みたくなる。

他に先行の連絡のある方はいらっしやいませんね、ニルリトが議場を見回し、咳払いをした。

「では、朝の会議を開始致します。昨日は会議を行えませんでしたので、いろいろ先延ばしになっている議案もあるのですが：、まあ前置きはいいでしょう、本日の本題に入ります。警察局長」

「はい、では：こちらのキインカがご説明致します」

ハゲに呼ばれたデブが起立し、一礼する。

「皆さんもうある程度はご存知かと思いますが：昨日午前三時、王宮内でプロン卿の御令嬢ハールム・プロン嬢の遺体が発見されま

した。死因は頸部の圧迫による窒息と思われますが、正確な死因と死亡推定時刻の結果は司法解剖後、予定では明後日に発表させていただきます。外見としましては、頸部に紐または布状のものが巻かれた鬱血痕があり、その他の大きな外傷は見受けられませんでした。第一発見者はアディ・アカシャ・シロム王太子殿下、遺体の発見場所は王太子殿下の御寝室でした」

キインカがひとつ息を付いた。場内は静まり返っている。

「王宮の衛兵及び、晩餐会場周辺の警備に当たっていた王宮警察の警備官の証言では、事件発生当日の夕刻から夜間にかけての不審者の発見報告はなし。今のところ足跡、遺留品などの犯人の痕跡も発見されておりません。凶器もまだ発見されておらず、先程申し上げましたとおり紐または布状の何かではあると思われますが、現時点では特定には至っておりません」

おいおい、不審者も何も、あの日は晩餐会だったんだ。二百からの人間が招待されてたんだぞ。不審者の定義が「疑わしいやつ」なら、あの二百人全員不審者だろうが。

「プロン卿の証言に寄りますと、ハールム嬢は晩餐会の途中から卿と別行動を取られていた様です。時間は九時半ごろからのこと。それから死亡するまでの御令嬢の詳しい行動は捜査中です。そして晩餐会終了の十二時過ぎ、卿は自身の車で屋敷に戻ったとのこと。御令嬢はおそらくまだ城に残っていたと思われます」

「御令嬢を置いてひとりで？」

ニルリトが少し驚いた声で尋ねた。

「卿の証言ではそうなります」

ありえねえ、と言いたいが、昨日の赤毛の女給の話聞いてるこっちとしてはある程度察しは付く。女癖の悪いアディが会場からいなくなつて、その後男好きの我が娘が追う様に外に出た、つまりはそういうことだ。部屋に連れ込まれたとでも考えてたんだろな。まあプロンからすればこの展開は願ったり叶ったりだったはずだ。娘が王子に見染められて王家に興入れれば、この先何代かは王家の

庇護の元お家は安泰だし、貴族たちの中でのプロン家の影響力も飛躍的に伸びるだろうから。

「王宮警察としては、晩餐会中全ての客人の出入りを正確に調べるのは難しいと考えます。よって今後はハールム嬢の動きを中心に捜査を進めて行く方針です」

以上、とキインカが資料をテーブルに置いた。何か意見のある方は、とニルリトが議場を見回す。皆一様に顔を俯けている。

晩餐会でのふたりの様子から、お嬢さんがアディのお妃候補だったことは皆気付いているだろう。そして第一発見者はアディ、遺体発見現場もアディの部屋。この条件から一般的に連想される答えはつまり、晩餐会で紹介されたお嬢さんをアディが気に入る、自室へ連れ込んでやることやっちなおとうとしたら思いがけず抵抗された、んでアホが激昂して思わず首を絞めた、だ。完璧じゃねえか、疑う余地は毛の先ほどもない：わけでもない。

お嬢さんは残念ながらビッチだ、計らずと、娘を置いて帰った親父の行動がそれを裏付けてしまった。そんでアディは王子で、性格はともかく顔はいい。そんなアディに誘われたとして、お嬢さん断るか？　むしろ嬉々として付いてくるんじゃないか？　結婚とか家同士の関係とかそういうややこしいこととは別に、一国の王子様とセックスした、なんて、大学でもいい自慢のネタになるだろ。そう考えれば、「お嬢さんが抵抗して」、の件は成り立たないだろ。

問題はプロン卿が警察にどこまで話したか、だな。貴族ってのは自分じゃ何も出来ねえくせにプライドだけは高いのが常だ。そしてプロン家はそんな貴族連中の中でも五本の指に入る、歴史ある名家だ。その当主が、娘は大の男好きなので、王子とセックスしに行ったと思いついて帰りました、なんて警察に話すか？　まずありえねえ。お家の未来を背負ったと言っても過言ではなかった一人娘が死んで、王家とのコネクション手段がなくなった今、プロンはこっちに必要以上の気は使わないだろう。恐らく警察には、「娘は真面目で大人しい性格だった」「王子のダンスのお誘いに、娘はとても喜

んでいた」なんて適当なこと言ってやがるだろうな。クソ、こんなことになるなら最後まで晚餐会に出てりゃあよかった。マジでアディのアリバイの証言者を探さねえとヤバイ。あの晩あいつはサウスに出かけてた。お嬢さんにちよっかい出せるわけがねえんだ、絶対に。

「質疑が出ない様です。警察からの報告は以上とします。ここからは通常の朝の会議に入ります」

ニルリトの声で、警察たちが席を立つ。横を過ぎる連中の視線を感じるが気付かない振りで、とりあえずテーブルの懐中時計を開く。十時前、午後からどうするか。どうせ王宮は開店休業状態だ、サウスに行つてアディのアリバイの証人を探す：いや、ダメだ、留守の間にアディが警察に連行されちゃったらこっちは手の打ち様がねえ。王宮を離れるのは賢くないな。だったらあの赤毛の女の妹に話を聞くか？お嬢さんの周辺で、何か犯人の手がかりになることが起こつてねえかを確認したいが、問題はどうかやってプロンの屋敷からその妹やらを連れて来るか、だな。プロン卿に事情を話したとして、OKが出るわけがない。

「では、経済相からお願ひ致します。来年度公共工事費の予算の概要のご説明を願ひます。資料最初のページです。質疑は後ほど時間をとります」

経済相が起立する。何かちよつとげっそりした様な、気のせいかな？

会議が終わつて、他の女王付き側近と話していたニルリトに声をかける。

「陛下のご様子はどうだ」

「ああ、今朝はパン粥だけど一応食事も召し上がったよ。しかし本調子には遠い。熱もあるし：」

「ああ：。お怪我はされてないんだよな」

「頭から倒れたからあのときはさすがにヒヤッとしたけどね」

ニルリトが首を傾げて言った。

あの夜、お嬢さんの遺体を見つけて、迷ったが警察を呼ぶ前にニルリトを叩き起こした。いけ好かねえやつだが頭は切れる。女王とアディの安全確保、それに伴う王宮内の警備、警察への通報と説明、そしてどう考えてもアディが疑われる状況への対処、自分ひとりの処理できるとは思えなかったし、冷静な判断も不可能だった。

多分メチャクチャだっただろう自分の説明を、寝起き頭の一度聞きで理解したのはさすがだった（悔しいが）。ニルリトはすぐさま衛兵長を呼び付け警備兵を増員し、城内と門を固めさせた。その間にこっちは混乱し怯えるアディを宥めながら、警察への通報準備と、警察到着後の対処を考えていた。女王が倒れたと聞いたのは、ちょうど警察への書簡（こんな重大事項を使い走りに伝言させるわけにはいかない）を書き上げ、サインを入れたそのときだった。報告に行ったニルリトが止めるのも聞かず、アディの部屋に様子を見に行ったらしい。自ら現場で確かめようとするあたり、らしいといえらしいが、それで倒れられちゃあこっちは更にパニックだ。

「シヨックの方が大きいかもね。やっぱりあの死体はね…キツかったよね」

「…そうか」

いつの間にか他の側近たちはいなくなっていた。

ニルリトは少し考えて、言った。

「カルナ、ずっと聞いておきたかったんだけど」

「何だ」

「来年のことさ。王子が陛下の跡を継いだら、君はどうするつもりなんだ？」

「どうするって…」

どうするも何も、アディを制御できるのは自分しかないだろう。

それとも何だ、側近辞めろってか？

「怖い顔だな。勘違いしないでくれよ。別に君がいなくなっ欲しいわけじゃない。ただ、王付きの第一側近を君がやるんなら、こ

「つちにもいろいろ準備があるんだよ」

「ああ」

「そういうことか、一理ある。と言うか考えたことがなかった方がおかしいな。」

「来年の今頃、アディは王様だ。そのとき自分は、どうしているんだろう。」

「幸いまだ一年以上はある、でももし君がやるつもりなら、早めに連絡頂きたいね、これでも結構仕事してるから、引き継ぎが山ほどあるんだ」

「今はこの事態の收拾が先だ、落ち着いたら考えるさ」

「まあね、僕は陛下の様子を見に行つて来る。昨日は陛下の体調を理由にして事情聴取断つたけど、今日はそうもいかないしね。まあ上手くやつとくよ」

「ああ、頼んだ」

「事實はどうあれ、王子は無実だ。王家はクリーンだ」
ニルリトの目が一瞬鋭くなった。

「…ああ」

「頼んだよ、カルナ。王子は君が一番上手く操れる」

こっちの返事を待つことなく、ニルリトは部屋を出て行った。黒いスモッグの上、王付きの第一側近だけが巻く赤いケープが、その速い歩みに翻っていた。

いつの間にか片付けも終わり、会議室には誰もいない。

「そうだ、「事実」は関係ない。アディは、「王子」は、何もしない。それが王家にとっての「真実」であり、ニルリトの言うことは正しい。その方向に持つて行くのが自分の仕事だ。分かっている、なのに、チクショウ。何だってこんなに胸糞悪いんだ。」

会議室のある第二塔から城に戻り、一階の王族用のキッチン（今日は朝から通常営業だ）から、アディの昼食をワゴンに乗せて部屋

に戻ろうとすると、その部屋の前が何やら騒がしい。こっちから警備に付けた衛兵、警察から見張りを兼ねた警備員、何人もが自分の部屋の前に集まっている。

：何だ、凄まじくイヤな予感がする。

カルナ様！と驚く警備を押し退け、扉を開ける。

「カルナー、飯かあ？」

「：お前は何をしとるかドアホウがああああ！」

投げたのがワゴンじゃなかったただけ自分を褒めてやりたい。しかし料理が一皿無駄になっちゃったのは後でシェフに謝んねえと。

「あっちいいいいいい！」

顔面スूपまみれのクソガキの首根っこをとっ捕まえて、部屋の洗面所に放り込む。シンクに顔面を突っ込ませて、上から蛇口を捻った。つめてえ！とアディが暴れるが知ったことか。頭冷やせクソボケ！

「そんでお前らどっから入り込みやがった！とっとと出てけ！マジで一家郎党皆殺すぞ！」

うわああああ、と情けない声を上げて窓から逃げた顔は、毎度の悪友共だ。

：何だこの部屋！会議に出てた三時間やそこらでどうやってこんなひっくり返るんだ！ハリケーンで吹っ飛ばされたみたいじゃねえか！倒れたインクでデスクは真っ黒、灰皿は床に転がりカーペットは真っ白、ベッドは土足で上がったのが丸わりの足形だらけだ！履き出し窓の鍵を閉め（よく見たらカーテン半分外れてるじゃねえか！）、振り返ったら足元のビール瓶が倒れた。半端に残っていたビールが、ベージュのカーペットにみるみる黄色いシミを作って行く。見れば黄色のシミはここだけじゃない、四、六：ああ数えんのもイヤだ、

あのカギ、殺す。

「カルナ何しやがる！あっちいしつめてえじゃねえか！」

「何しやがるだあ？」

洗面所から上半身びっしやびしやのままフラフラ出て来たアホの頭を平手一発。相当酔ってやがるのか、覚束ない足は勢いに負けて床に転がった。…もうカーペットは買い替え決定だ！私物だが関係あるか、こいつの公務経費として落とすからな！

「何しやがるはこっちだ！何だこの部屋は！」

「いやあー…何だろうなあ…へへへ」

転がったまま笑う顔はまだ赤らんでいる。へへへ、へへへ、と何が嬉しいんだか気持ち悪い。

ふと顔を上げると、入り口ドア前の人山の中にゴダ警部が見えた。

「ゴダ警部、今いいか」

「あー…はい、私はいんですがー、王子がー」

「この足元のはいい、ちょっと聞きたいことがあるんだ」

「こちらもお話がありましたのでー」

皆、持ち場に戻りなさいー、と言うゴダの声に、完全に引いていた（そう言えばドア開けっぱなしだったな）衛兵も警察警備も我に返った様に、そそくさと離れて行った。

「…で、ゴダ話ってなんだ？」

ドアを閉めて、床のアホを蹴って端へどける。いていてえと言いながらしかし起き上がらない。多分このまま寝やがるな、もう知らん。

「蹴るのはー…」

「何だ？」

「あー…いえー、…実はですねえ、陛下へのー、事情聴取の許可がー、下りないものでー…」

「今は伏せてらっしゃるからな。ちょっと厳しいな」

「それはー、重々承知なのですがー…」

「…第一側近のニルリトに話しておく。でも今日は厳しいと思ってくれ。陛下はちゃんと食事を取れる様になったくらいなんだ」

「そうですかー…」

警察としては、最も怪しんでいる人物の親なら、病氣していよう

が怪我していろいろ話を聞きに行つて当然だろう。しかしここは世間一般の常識が通用する場所じゃない。

「あのババアマジム力つくぜー」

突然足元から大声が。この酔っ払いは何をほざいてやがるんだ！

「ババアとはどういうつもりだアホ！」

「ババアはババアー、あいつ俺を疑つてんだろうがあ！だからシヨックで倒れたりすんだろうあがががが！」

アホの頬っぺたを思いつきりつねる。どの口だそんなこと言つてやがるのは！

「不敬罪でしょっ引いてもらうぞここで！」

「カルナ様もー、大概ー、不敬罪ですー！」

「違う、駄だ」

いけませんー！とゴダが悲しい声で言うので仕方なく手を離れた。

「…そうかカルナも敵かあ！俺の味方はいねえのかあ！」

「黙れ酔っ払い！ばたばたすんな駄々っ子かお前は！」

「るっせーみんな嫌いだかなああ！」

ばーかばーかばかやろう！、と叫んで、アデイがぴたり止まった。

…寝たらしい。

「アルコール中毒でー、ないですよねー？」

ゴダが重そうに体を屈め、アデイの右腕に触れた。丁寧にシャツの袖を捲つて、わざわざ脈を看ているらしい。

「アル中でそのまま死んでくれたら俺は嬉しいがな」

「…カルナ様ー、不敬罪ですよー…大体…」

ゴダの声が止まった。あれ、ヤバいか？今までの経験上ビールでこの空き瓶量くらいなら何ともないはずなんだが…。

「…どうかしたか？」

「いいえー、何でもー…、ご心配なさらずー」

大丈夫そうですー、と袖を直して、ゴダがのっそり立ち上がった。体すげえ重そうだな、経済相といい警察のおっさん共といい、みんな少しランニングでもすりゃあいいのに。アデイが王になったら条

例でも作るか。ある程度の体重超えたら毎朝王宮周五週のランニングに参加しないと罰金とか。考えとこう。

「…アホのことはいい、ゴダ、聞きたいことがあるんだ」

「お答えできることなら…」

「そう警戒すんなって。あのさ、お嬢さんのドレスって見つかったか？」

「えー…と、それはー…」

ゴダが言葉に詰まった。警察もやっぱ同じこと考えてやがったな。「気付いてねえなんて言わせねえぞ、俺は見てるからな。お嬢さんは全裸だった。パンツ一枚履いてなかった。下着なんてのは裏の焼却炉でも燃やしちまえばすぐ証拠はなくなる。でもあのドレスはそうはいかねえだろ。何せあのボリユームのスカート運んで歩いてちゃ目立つしな」

「…下着はー、見つけていますー。王子の部屋のー、ベッドの下からー…」

「ドレスは見つかってねえんだな？」

「…まあー、それはー、機密ですのー…」

濁しながらも否定はしない、それで十分だ。

「すまねえな、言いづらいこと聞いて」

「カルナ様ー、私からー、ひとつだけー」

「何だ」

「…私はー、一介のー、警部でしかありませんがー、相手がー、何人でもー、引く気はありませんー」

「…ああ。それでこそ、この国の王宮警察だよ」

「はいー、…それではー」

口調はアレだが、声色で分かる。冷たく、揺るぎない、ゴダはマジだ。

ニルリトは、この王家を守るためにあらゆることをするのだろう。金も権力も、使えるものは全て使って王家を守るつもりだろう。

そして、ゴダは、その金にも権力にも屈しないと宣言した。罪の

形は人の地位で変わるものであってはならないからだ。

ニルリトも、ゴダも、それぞれの職務を考えればどっちも正論だ。自分はどうするのか。どうすべきなのか。

ばたん、と閉まったドアの音が遠く聞こえた。

俯けた視線の先、足元で寝るアホの顔は、酔い潰れたとは思えないくらいに幼い。

「あいつ俺を疑ってる」とアディは言った。そうかもしれねえ。お嬢さんのひどい遺体を見たショックなんかじゃなく、女王は、息子が人を殺したと思い嘆いて部屋に閉じこもっているのかもしれない。

母親って、こういうとき、どうするもんなんだろうな。分かんねえ、親になったことねえし、自分の母親はさっさと死んじまった、顔すらよく覚えてねえ。

「……」

何だ？何か言ってるか？

アディの横に膝を付いて、耳を澄ます。

「……」

ダメだ、聞こえねえ。

あの悪友連中なら、この声が聞こえたのか。

起こさない様に、そっと、アディの頭を撫でる。金の髪はまだ湿って、冷たい。ベッドに運んでやりたいが、今や体型は逆転して、自分だけじゃ到底こいつを支えられない。それが成長ってもんで、喜ばしいことなんだが、何だろうな、ちょっとだけ淋しい、と思っちまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7830v/>

とある王家の●●なる日常

2011年10月9日14時58分発行